

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
大学院学生研究
2023年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	教育学 専攻
研究代表者 (2024年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年	氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年	菊地 虹	
指導教員	所属部局・職名	氏名	
	文学部 教授	渡辺 哲男	
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	マルセル・デュシャンの美術教育における位置づけ:現代美術の文脈主義に 着目して		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2024年3月現 在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏名	
	文学研究科・教育学専攻・博士課程 後期課程・1年	菊地 虹	
研究期間	2023 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究はマルセル・デュシャンを代表する現代美術がどのように日本の美術教育で受容されたのか、もしくは受容可能なのかを、日本の美術教育の歴史や思想を位置付けながら検討するものである。日本の美術教育における思想や表現観、方法は、大正期にはじまり今日にいたるまで幾度かの転換を経て著しく変化してきた。本研究ではその変遷を捉えるため、まず大正期の美術教育の転換である山本鼎の自由画教育運動と、昭和期の転換である「造形遊び」に注目する。また、さらなる展望として、マルセル・デュシャンの表現観を応用した現代美術による美術教育の可能性を検討する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 現代美術 } { 自由画教育運動 } { 造形遊び }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、主に文献を用いた歴史・理論の研究、授業実践を用いた理論・実践の研究を行なった。特に、マルセル・デュシャンの理論を軸とした現代美術と美術教育の接続を目指した。研究の成果は、主に学会発表と投稿論文に示される。概要は以下の通りである。

①教育思想史学会第 33 回大会コロキウム (学会発表)**コロキウム題目：**

教育実践をめぐる「遊び」概念の検討：教育実践における造形遊び・体育科ダンス・ビデオゲームの思想に触れる

報告題目：

「造形遊び」批判：美術家教育の視点から「遊び」の問題を考える

概要：

本報告は、美術教育と美術家教育の基盤となる思想を「造形遊び」を手がかりに比較し、美術教育における「遊び」と美術家教育における「遊び」の重なりを描き、浮かび上がる教育観のずれやそこに潜在する課題を明らかにすることを目的とした。そのために、まず、報告者の携わってきた美術家教育の現場の動向を確認し、美術家教育の文脈重視の動向を生んだ歴史的転換点とも言えるマルセル・デュシャンの作品と、美術家教育の授業実践で行われる「ドローイング」を例に、美術家教育の基盤となる美術文化の思想と実施される実践の現状を確認した。次に、「造形遊び」をケースに、美術教育の「遊び」性を活かした活動の理論と実践の思想的文脈を確認した。そして、美術家教育と美術教育の基盤となる思想を比較することで、両者の教育の目的や教授法のずれを「遊び」の捉え方に着目して検討した。最後に、美術家教育と比較したときに指摘しうる美術教育における「遊び」の特徴と問題を、「造形遊び」を例に取り上げ、批判し、美術制作者の視点で論じた。

本報告では、あえて「美術教育」と「美術家教育」を区別し論じた。というのも、美術予備校に通い美術系大学で学んだ報告者自身の経験から、それらと学校教育を主とした美術教育との間に大きな断絶を感じてのことであった。特に大きな断絶を感じたのは、「現代美術」に関する理解や解釈であった。そこで、この両者の比較検討を通じて、「美術教育」を批判的に見ることで、課題や今後の展望を示す契機を創出することを試みるべく、本報告に至った。

本報告の題目に「批判」という言葉を含めたが、報告者は「造形遊び」そのものに問題があるとは考えていない。しかし、「造形遊び」をどのように美術教育の中に位置付け、カリキュラムとして十分に機能させるかについては以前課題があり、一考の価値があると考えた。そこで本報告では、専門家育成の教育機関で行われる美術家教育にみられる文脈重視の動向と実践に着目することで、「造形遊び」の潜在的な課題を明らかにするとともに、課題改善に向けた提案を試みた。

報告を終えて：

「造形遊び」に括弧をつけて扱ったのは、今回対象としたものを小学校で導入されたものに限定したからである。報告後の質疑応答では、幼児教育での造形遊びとの関係や比較に関する質問をいただいた。幼児教育を含め、一般に行われている造形遊びは必ずしも本報告の文脈では捉えられない。しかしながら、この質問によって、一般の造形遊びと「造形遊び」にも断絶がある問題が浮き彫りになった。一般的な造形遊びと「造形遊び」の比較と接続は今後の課題としたい。

現時点では所感に過ぎないが、報告者は戦後以降、学校の「美術」は実社会の「美術」と距離をとるようになって考えている。学校の中で、「美術」は社会性や現実的な制約から解放される場として尊重され、自由な表現・表出の場や機会を保障してきたと言えるだろう。しかし、社会から切り離した自由とは、果たしていかなる自由なのだろうか。「遊び」の問題を考えるとき、純粋な「遊び」の周囲に、常にそれをとりまく、非純粋で透明な社会の存在があるような気がしてならない。「美術」とは本来、それを可視化することも機能のうちにあるのではなからうか。

②第 62 回大学美術教育学会香川大会 (学会発表)**口頭発表題目：**

『中央公論』における「自由画論争」の考察

概要：

山本鼎 (1882-1946) の自由画教育運動は、それまでの模写を基本とする臨画教育を批判し、写生を主とする美術教育を推進することで、その後の美術教育の動向に大きく影響を与えるものであった。現在では一般に浸透しているが、当時の人々に最初から速やかに受け入れられたわけではない。山本の構想には、当時の図画教員らや一部の芸術家からの批判が加えられることになる。この時の衝突の経緯や背景を、『日本教育論争史録』では「自由画論争」としてまとめている。本書では、主に『中央公論』における山本鼎の論文とそれに対する図画教員ら (谷鎌太郎、本間良助、今井伴次郎) の抗議文を軸として、コンパクトに自由画にまつわる論争が把握できるようになっている。

研究成果の概要 (つづき)

しかし、本書の内容を読むと、いくつか誤解を招く表現がなされている。例えば、自由画運動の宣言を『中央公論』に山本が寄せた論文である「自由画教育の要点」としているが、この論文は自由画運動の構想を漏れなくまとめ宣言するために書かれたものではない。また、山本が批判した図画教育の方法を実践している図画教員が『中央公論』へ抗議文を寄せたような表現がなされているが、実際は従来の図画教育を改革する志を持つ者同士の衝突であり、山本が直接批判した図画教員からの応答ではない。

『日本教育論争史録』のように、『中央公論』上でのやりとりを自由画教育運動の論争の代表例として扱う例は少なくない。しかし、これらの論文は、『中央公論』に掲載される前の文脈を踏まえなければ正しく理解できない特殊な経緯を持ったテキストである。

そこで本発表では、『中央公論』における論争の文脈を明らかにしつつ、本論争が両者いかなる立場から衝突したものであったかを検討した。また、山本や図画教員らの言説を追うことでそれぞれの関係性をマッピングすることを試みた。よって、研究の対象として『中央公論』の山本と図画教員 3 名による抗議文に加え、これらが掲載されるまでの経緯がわかる『教育問題研究』に寄せられた古閑停の「山本鼎氏の自由画教育に対する駁論を駁す」を参照した。

発表を終えて：

本発表では、主に自由画教育における論争を概観した。一方で、本発表では図画教員らと提唱者である山本鼎の衝突しか検討することができなかった。当時の児童中心的な自由主義の教育を一般に大正新教育と呼ぶが、自由画教育運動そのものがどのような位置付けがなされたのか、他の教育運動とどのように連動し、もしくは連動しなかったのか、のちの時代にどのように連続し、もしくは連続しなかったのかは今後の課題としたい。現時点では、自由画教育運動の時代のトルストイ思想の受容と、久保貞次郎らによる創造美育運動を対象に検討することを目指している。

③立教大学大学院教育学研究集録 第 21 号 (論文投稿)**題目：**

教員養成課程の学生による現代アートの授業実践：「批判的自己表現」としてのコンセプチュアル・アートに着目して

概要：

本稿は、教員養成課程の学生が現代アートを制作する実践を通して、造形による表現に限定されない美術表現のありようを示し、近代から現代の美術、そして美術教育の自己表現観の断絶を連続させる視座を提示することを試みた。

筆者は、立教大学文学部教育学科初等教員養成課程の必修科目である「造形表現」において、ティーチング・アシスタントとして授業の補助に勤めた。その際、現代アートの鑑賞とコンセプチュアル・アートを制作する授業実践を行った。現代アートの中でも、もっとも造形的要素の少ないコンセプチュアル・アートを扱うことは美術教育の授業実践の中でも稀有な事例であり、授業実践の記録、検討と分析には一定の意義があると考え、本稿の執筆に至った。

本稿は、美術教育といわゆる現代美術(現代アート)をつなぐことを目指した。検討は以下の手順で進めた。まず、今日の美術教育の抱える表現観に関する課題を明らかにし、自己表現に関する新たな分析枠組みとして批判的自己表現を提示することで、その課題を捉え直し連続させることを目指した。また、批判的自己表現の例としてコンセプチュアル・アートに着目した。次に、その分析枠組みに基づいて実施された現代アートの授業実践の内容を整理し、その実践結果から本実践を分析した。最後に、本実践から明らかになる美術教育への応用の可能性とその意義を論じた。

執筆を終えて：

本実践を検討した結果、現代アートの実践により、美術への苦手意識の解消や、批判的視点による表現の技能の獲得が見られた。しかし、本稿の授業実践報告及び分析は、授業実践の記録や学生からのヒアリングなど、分析のためのデータが不足していた。継続的に研究を行い、質的調査のための十分なデータを収集し、より深く分析しなければ、この実践の意義や有効性は明らかにしきれないだろう。また、今回の実践対象が大学生であったことから、現代美術(現代アート)の実践がどの年齢層まで適応できるのか、検討の余地があると考え、以上のことは、本実践の今後の課題としたい。

現時点で、高等学校の学生に向けた現代アートの授業実践を計画している。本実践の課題を解消すべく、十分な準備とデータの収集に力を入れたい。また、実践における現代アートの理論的な枠組みも検討を重ねていきたい。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 菊地虹、「教員養成課程の学生による現代アートの授業実践：「批判的自己表現」としてのコンセプチュアル・アートに着目して」、『立教大学大学院教育学研究集録』、第21号、2024年、pp. 37-54

② 該当なし

③ 該当なし

④ 菊地虹、(学会発表) 教育思想史学会第33回大会コロキウム、「「造形遊び」批判：美術家教育の視点から「遊び」の問題を考える」、2023年9月

菊地虹、(学会発表) 第62回大学美術教育学会香川大会、「『中央公論』における「自由画論争」の考察」、2023年9月